

平成20年度

学びあい支えあい
地域活性化推進事業
活動報告書

あなたも
考え
みんな
で活動する

NPO法人
えひめ子どもチャレンジ
支援機構

えひめ子どもチャレンジ支援機構



NPO法人
えひめ子どもチャレンジ
支援機構
理事長 村上 伸二

3年目を迎えた「みんなでチャレンジ みんなのチャレンジ」活動を終えて、よく耳にするのが「子どもが成長した」ということである。

行動が積極的になり、自分の考えをはっきり述べるようになり、周りの動向に気配りしながら行動ができるようになり、活動の結果に強い関心を示すようになる。そんな子どもの姿がたびたび見られるようになった。関係している大人にとっては、まことに喜ばしいことである。

子どもたちのこのような成長の背景には「みなチャレ」の活動があるとの自負を持ちたいと思う。

社会が豊かになり、消費主義が蔓延するにしたがって、人々が自分の欲求を肥大化させるようになった。必要以上のサービスを求め、満たされないと激しく抗議する。クレーマーの広がりも、その典型であろう。

また、ひたすら「財」を求める人々も社会の前面に出始めた。以前は、本音が「金儲け主義」でも、控え目に振舞う「品」があったと思うが、今はずいぶん変わった。

さらに、肥大な自分の力を求め、かつ顕示する傾向も目立つ。仮想的自尊心もそれであり、無差別に人を殺めるなども、その極端な姿であろう。

一方、「みなチャレ」の子どもたちは、何を求めたのであろうか。

「ゼロ・スタート」の「みなチャレ」に参加しようというのだから、予定調和的な要求の対象は存在しない。にもかかわらず、「参加してみよう」と思い立ったのは、何を求め、何を期待してのことだったのだろう。

参加者にとって、「みなチャレ」の活動は、たとえ連続参加であろうと、毎年リセットされた活動であるから「未知」であり、「未体験」の世界に違いない。彼らは、この「未知なるもの」「未体験なるもの」に魅力を覚え、参加を決めたのだろう。

「未知」や「未体験」は、自らの活動によって、初めてその姿を表すものだから、先の、消費主義的な行動とはずいぶん異なる。何しろ、受身ではない。待っているのは、何も実現しないわけだから。

このような生き方は、文明化の過程からすれば、かなり古い時代のスタイルではないだろうか。いわば、人間の原始性に潜むエネルギーを解き放つ生き方のように思う。

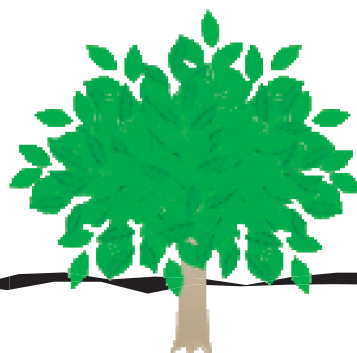
それは、「生きるとは、何かに向かって放たれていること、一つの目標に向かって歩むこと」（『大衆の反逆』）というオルテガの精神にも通ずるように思う。自ら目標を創出し、みんなが力を合わせ、大人の知恵や技も巧みに活用しながら自分たちの目標実現を図る。これこそ、まさに、人間の本来の生き方とはいえないだろうか。

作家の中谷彰宏が、「自立ということは、自分ひとりで生きていくことではない」（愛媛新聞）といい、また、鷺田清一が「自立というのは（中略）インターディペンデント（相互依存的）な仕組みをどう運用するか、その作法を身につけることが本当の意味で自立なんじゃないか」（『大人のいない国』）という意味で、「みなチャレ」の子どもたちは、着実に自立の過程を歩んでいる。

なるほど、彼らの姿に冒頭のような成長の姿が見られたはずである。

終わりに、「みんなでチャレンジ みんなのチャレンジ」に力を貸していただいた愛南町の方々をはじめ「子チャレ」のみなさんに心からのお礼と感謝を申し上げます。

目次



「求める」ことと「生き方」の間

えひめ子どもチャレンジ支援機構理事長 村上伸二 2

自主事業

「みんなでチャレンジみんなのチャレンジ」活動報告 4

松山でチャレンジ・八幡浜でチャレンジ

チャレンジを終えて 18

つぶやき座談会 宇都宮正男・井門照雄・本田精志

支援事業

①地域安全マップづくり支援事業 20

（松山市荏原地区）

②中学生ジュニアリーダー研修会2008 23

③無人島チャレンジ実行委員会 25

④地域教育実践交流会 28

平成20年度の活動を振り返って 32

伊方町“瀬戸アグリトピア”にて

支援事業について報道記事 34

設立趣意書 35